

## コンプリート！

(ヨハネ一九・二三〜三〇)

折からの「終活」の影響もあるのだろう、「辞世の句」「最期のことば」と打ってググってみるとまとめサイトが相当数出てくる。「新生だ（北原白秋）」「どうもぼくにはわからない（野口英世）」「せめてあと五年の命があったら、本当の絵師になれるのだが（葛飾北斎）」など色々だ。中には処刑を躊躇する兵士に「落ち着け、よく狙え、お前は一人の人間を殺すのだ」と声をかけた（チェ・ゲバラ）という勇ましいものも。生きざまというものについて考えずにはおれない。

聖書にはイエスの十字架上で言葉が七つ保存されており、よくひとまとめにされて説教されたり、音楽のテーマを提供していたりする（例：ハイドンのオラトリオ）のだが、その試みは個別の聖書テキストに解釈者による歴史的再構成を加えることにより、テキスト本来の色が見えにくくなる嫌いがある。今朝はこの福音書において語られたイエスの言葉に注目して、十字架の上のイエスのことばに耳を傾けたい。

## 一、新しい共同体の原型の成就

十二弟子たちの大多数がイエスのもとを去ってしまった中、十字架のそばに残っていたのはイエスの母をはじめとする女性たちと、伝統的に使徒ヨハネだと目される「(主の)愛する弟子」であった。そのときイエスはマリヤに「女の方」と声をかける。これは何とも不思議である。死を目前にしているのだ。素直に「おかあさん」と呼べばよいではないかと思うのだが、実はこの他人行儀にも思える呼称にこそ深い意味がある。聖霊によるとはいえイエスはマリヤの胎から生まれた存在である以上、二人は血肉によって結ばれている。だがまもなく世を去ろうとするイエスは彼女に新しい息子を与えるのだ。そしてこの愛する弟子とイエスの母マリヤを結ぶものは血肉ではなく、イエスの言葉であり、かつそれを受け入れる信仰である。それは私たちにこの福音書の序章にある「この人々は、血によってではなく、肉の欲求や人の意欲によってでもなく、ただ、神によって生まれたのである(一・一二)」を想起させる。よってこの言葉の意味を単に肉親の将来を案じてというレベルに留めるべきではない。それはむしろ血肉を超えた神の家族の交わりの基礎が据えられた瞬間だったのである。

## 二、聖書の成就

続く三八節においてイエスは「わたしは渇く」と言われた。これは当然イエス自身のがが渇かれたことを示していると考えてよい。何せ捕縛されてからおそらく一睡もしないまま引き回され、十字架の横木を背負ってさらしものにされた末の磔刑だ。イエスの肉体は極限状態であった。そのことを考えればこのつぶやきは当然のものである。しかし福音書記者はこの行為に神学的な解説を施す。それが「イエスは、すべてのことが完了したのを知って、聖書が成就するために」というト書きである。母マリヤを弟子に任せ、自らの十字架の下に後に教会となる信仰共同体のひな形を見たイエスは、自分の任務が完了したことを悟った。そのうえでこの言葉を語ったというのだ。このことを予表していると思われる聖句は「彼らは私の食物の代わりに、苦みを与え、私が渇いたときには酔を飲ませました。」(詩六九・二二)である。その詩の中には敵対者に囲まれ、恥を受け侮辱され、救いを待ち望む者の姿が描かれている。これは人の罪を負い、その苦しみを受け、神にまで捨てられる苦難のメシアであるイエスの姿を確かに彷彿させる。後にパウロが言うようにイエスは確かに神の啓示である律法の目標であり、その終点なのだ。(参・ロー一〇・四)

\* \* \*

ヨハネ福音書におけるイエスの最後のことばは「完了した」である。ちなみに口語訳では「すべてが終わった」と訳されている。これは確かに可能な訳出だが、誤解を招きやすい。というのは「すべてが終わった」と言われ、首をたれて息を引き取られた」ではあたかもイエスが絶望して死んだという印象を与えかねないからである。しかしこれはこの福音書の描くイエスの姿ではない。何度も語ったようにヨハネ福音書において十字架はむごたらしい刑場にして、同時に神の栄光の現れる場であり、キリストによる全世界の救済が現実化する完成の場である。そう考えれば日本語の語感としては少々奇異に映るかもしれないが、新改訳の「完了した」は福音書記者の意図をよく汲んでいると言えよう。イエスがどのようにこれを語ったかについて福音書記者は沈黙しているが、どうあれイエスは「完了した」のだ。何をか。人類を救うという神の使命、ミッションをである。イエスは神の御心の完成者であり、そこにあつたのは静かな、しかし確たる勝利である。イエスは聖書全体の目的にして、人類に希望を与える唯一の答えだ。友よ、十字架の主を見上げよう。救いはそこにある。アーメン。